

平成 21 年 4 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006—2008
 課題番号：19710203
 研究課題名（和文） 中央アジア社会の持続性：ウズベキスタンの近隣コミュニティ（マハッラ）の実態調査
 研究課題名（英文） Sustainability in Post-Soviet Central Asia: The case study of Mahalla Community
 研究代表者 ティムール・ダダバエフ（Timur Dadabaev）
 筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
 研究者番号： 10376626

研究成果の概要：

ウズベキスタンなど中央アジアの 5 カ国は、1991 年のソ連解体後、新しい独立国家として国際社会に参入した。これらの国々は、政治と経済の大転換を行うとともに、社会の安定をはかる努力を続けている。現在中央アジアが直面している課題は数多いが、この大転換期において社会の安定を支えているのは何だろうか。そこで注目されるのが、マハッラとよばれる近隣コミュニティの存在である。このマハッラは、転換期の中央アジアにおいても持続的な社会発展を支える組織、あるいは市民社会の基盤として関心を集めている。本研究は、現地の研究者と共同してウズベキスタンのマハッラに関する実態調査を行い、その現状と課題を解明することを目的として行われた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	1,800,000	0	1,800,000
2008 年度	1,500,000	450,000	1,500,000
年度			
年度			
年度			
総 計	3,300,000	450,000	3,750,000

研究分野：国際関係・国際政治

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：旧ソ連地域、地域開発、マハッラ、地域社会、コミュニティ、ウズベキスタン

1. 研究開始当初の背景

中央アジアは、19 世紀後半に帝政ロシアの植民地とされた後、1917 年のロシア革命を契機として政治と社会、文化のあらゆる領域で社会主義化を経験し、およそ 70 年にわたるソ連時代に現代世界でも類をみないほどの大規模な変革が進行した。そして、1991 年のソ連解体後、新しい独立国家として国際社会に参入した。この新生の中央アジア諸国は、政治と経

済の大転換をめざすとともに、国家と社会の安定をはかる努力を続けている。このように中央アジア社会は、その近現代史の中で大きな変容を相次いで経験してきたが、その中にあって社会の独自性はさまざまな面で保持されてきたことも見逃せない。とりわけ中央アジアの南部では、歴史的にマハッラとよばれる近隣コミュニティが旺盛な持続力を発揮し、政治・経済的な変動にもかかわらず、地域の人々の安全と生活を守る基本的な社会組織として機能

してきた。ソ連から独立した現在、このマハッラは転換期の中央アジア諸国における持続的な社会発展を支える組織、あるいは市民社会の基盤として注目されている。

2. 研究の目的

本研究は、ウズベキスタンのマハッラに関する実態調査を行い、中央アジア社会の持続性を支えるメカニズムを解明することを目的とする。

本研究は、ウズベキスタンのマハッラに焦点を当て、その実態および存在意義と国民の間にマハッラに対する姿勢とマハッラの社会における役割の理解を深めることを目的としている。その中で中心となる検討課題は以下の二点である。

「公式なマハッラ」と「非公式なマハッラ」

現段階までの研究成果で、応募者は中央アジア地域におけるマハッラとは何かを定義づけ、マハッラの機能と役割の二重性を強調した。すなわち、近年のマハッラの変化を踏まえ、マハッラは歴史的に、非公式的な人的ネットワークであると共に、独立後の現状の中で国家行政機関として機能している。先行研究では「公式なマハッラ」について詳細な分析が行われてきたが、マハッラの「非公式」な側面に関する検討はまだ十分になされていない。本研究は、応募者のこれまでの研究成果に基づき、以下をさらに検討する。

①「非公式なマハッラ」とはどのようなものなのか

②人々の「非公式なマハッラ」に対する考え方はどのようなものなのか

具体的な検討対象の一例

マハッラの人的ネットワークと、宗教機関であるモスクの相互関連を探索。具体的には、モスクはマハッラにおいて生活の中心を構成するのか、そうでなければ、マハッラ内のモスクの役割は何なのかを検討する。更に、現代のマハッラにおいてのモスクの役割をソ連時代においてのマハッラと宗教機関との関係と比べてコミュニティとモスクの関係を明確にすることを目指す。

ソ連時代のマハッラ—変容と持続性—

ソ連崩壊後のマハッラの姿については一定程度の研究蓄積がある一方、ソ連時代のマハッラについては、その実態、社会内の位置づけと役割、変化等の様々な側面について十分に検討されていない。しかし、「公式なマハッラ」だけでなく「非公式なネットワーク」としてのマハッラを研究する上では、そのネットワークが現在どのような形で現れているのかに加え、過去との連続性を把握・分析することが不可

欠である。そのことから、本研究では、主にソ連時代について以下を把握・分析してきた。

①人々がマハッラをどのように認識していたか
②ネットワークが社会内でどのように位置づけられたのか

③社会の変化に伴ってマハッラがどのように変わったのか

3. 研究の方法

本研究は、ウズベキスタンのマハッラの事例を用いつつ、①ソ連時代におけるマハッラを歴史的に位置づけた上で、②ソ連崩壊後の中央アジア地域におけるマハッラの仕組みと役割を現状の調査・分析を通して検討し、③マハッラのような伝統的地域社会と国家建設の関連性を検討した。

そのために、ウズベキスタンの学術研究において第一線で活動する研究機関と共同で現地調査・分析を行った。具体的には、外務省付属世界経済外交大学や大統領付戦略問題研究所の研究者をパートナーとし、調査地域・対象選択、調査の準備・実施を計画段階から議論し決定した。これは、研究対象地域からの問題提起と地域外の研究者の研究関心双方を活かすことにつながり、調査とその成果を強化した。

本研究は、民族問題に対するマハッラの役割を調査・分析する上で、現地のコミュニティ・民族の長老、リーダーや NGO、企業家らの幅広い参加を反映させることが不可欠である。従って、彼らの参加により多面的かつ重層的なネットワークを構築した。一例として、サマルカンド市とタシケント州の長老が上げられ、この長老達、NGO や企業家らと現地で打合わせを行ってきた。その中で、現地調査の役割分担、協力者の数、参加方法などを決めてきた。

4. 研究成果

- 本研究には、調査・分析を実行する上で、現地の長老やマハッラのリーダー、実務家の幅広い参加を促し分析に反映させるという特色がある。これは、マハッラの歴史および地位の変化と、様々な不安定要因や民族問題に対するローカルレベルでの認識の深化を促す。

- 本研究は、中央アジア地域で形成段階の初期にある市民社会意識を分析する契機になるとともに、マハッラが中央アジア諸国の地域社会内で発生する民族間・社会内諸問題に対応する新たな可能性を指摘する、という点で学術的独創性をもつ。

・ 結果として、本研究は、伝統的な仕組みが現代社会の問題解決に有効であるとすれば、それはどのような側面においてなのか、その中で長老やマハッラのリーダーの役割はいかなるものかを明らかにした。そうすることで、本研究は地域社会が時代・状況・環境の変化に応じてコミュニティレベルで生じる問題に対応するための具体的かつ新たな手法を明らかにすることを試みた。

➤ 本研究は、ウズベキスタンのマハッラを通して、中央アジア諸国における社会再編成、新国家形成や市民社会の発展に関する貴重な情報を提供する。そのような研究が未だ少ない中、調査や出版を通して、現地から直接情報を提供する意義は大きい。この観点から、本研究は日本および中央アジア地域における中央アジア研究に重要な貢献をすると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

【1】ティムール・ダダバエフ、「中央アジアの市民社会組織からみた多元的共生の可能性」、宇田川妙子編、『多元的共生を求めて』、東信堂、pp.162-174、2009 査読の有

【2】ティムール・ダダバエフ、「日本の対中央アジア協力の現状と課題—機能主義の観点から」、宇山智彦、クリストファー・レン、廣瀬徹也編『日本の中央アジア外交』、北海道大学出版会、pp. 97-114、2009 査読の有

【3】Timur Dadabaev, "Conceptualizing Central Asian Regional Studies in Japan: Approaches, Perspectives and Issues", *Asia Annual*, Kolkata: Institute of Asian Studies, pp.85-98, 2008 査読の有

【4】Timur Dadabaev, "Introduction to the Survey Research in Post-Soviet Central Asia: Tasks, Challenges and Frontiers", *Asian Research Trends: New Series (NART)*, No. 3, Tokyo: Toyo Bunko, pp. 45-70, 2008 査読の有

【5】ティムール・ダダバエフ、「地方主義と国家—ウズベキスタンとタジキスタンにおけるソビエト人事政策とその影響—」、『国際政治経済学研究』(筑波大学国際政治経済学専攻紀要)、第21号、pp.13-37、2008. 査読の有

【6】ティムール・ダダバエフ、「中央アジア地域における水管理政策と諸国間関係：現状、課題と展望」、『地域研究』、29号、(筑波大学地域研究研究科紀要)、pp.23-40、2008 査読の有

〔学会発表〕(計 10 件)

【1】Timur Dadabaev, "Memory of the past and post-Soviet Central Asian Societies: Continuity and the change in Kyrgyzstan and Uzbekistan", Eurasian Studies: Past, Present and Future, Joint International Conference organized by the Maltepe University (Turkey), University of Tokyo, and the University of Tsukuba, Maltepe University, Eurasian Studies Center, 2009 年 3 月 15 日。

【2】ティムール・ダダバエフ、「中央アジア諸国における宗教過激集団の構造～宗教過激思想の拡大と政府の対応～」、外務省主催分析研究会、東京、2009 年 3 月 6 日。

【3】Timur Dadabaev, "Migration, Border, and Citizenship in Central Asia", International Conference "Resurgence of Russia and the Future of Eurasia-Views from the East", First East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 2009 年 2 月 5-6 日, Slavic Research Center, University of Hokkaido。

【4】Timur Dadabaev, "Power, everyday life experiences and public memory in post-Soviet Uzbekistan and Kyrgyzstan", International Workshop "Oral Histories of Socialist Modernities: Memories and Lived Experiences in Central and Inner Asia", Mongolia and Inner Asia Studies Unit, University of Cambridge, 2008 年 12 月 16-17 日。

【5】Timur Dadabaev, "Trauma, Public Memory and Identity in Central Asia", International Conference "Nakba Revisited: Memories and Histories from a Comparative Perspective", 東京大学東洋文化研究所会議室、2008 年 12 月 12 日。

【6】Timur Dadabaev, "Methodological and Conceptual Aspects of an Oral History Project in Uzbekistan and Kyrgyzstan", International Workshop "Central Asian History – Vision and Revision", Department of South and Central Asian Studies, Stockholm University and Museum of Ethnography, Stockholm, 2008 年 10 月 1-2 日。

【7】ティムール・ダダバエフ、「中央アジア

地域における民主化』、『アジア研究会』福島大学、2008年7月17日。

【8】ティムール・ダダバエフ、「中央アジアの人々の意識変化：ウズベキスタンを中心に」、『2008年アジア経済研究所夏期公開講座：コース2 中央アジア諸国の現在』、ジェトロ東京本部、5階 ABCD 会議室、2008年7月15日。

【9】ティムール・ダダバエフ、「中央アジア地域における地方主義の実態と課題—ウズベキスタンとタジキスタンの事例から」、『アジアにおける環境共生と日本の役割—価値創造に基づく地域研究のあり方—』、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス棟11、2008年6月28日。

【10】ティムール・ダダバエフ、「アラル海領域における水資源管理の現状、課題と展望」、『アラル海問題：住民の遺伝子プール、動植物世界への影響とその影響軽減のための取り組み』、JICA 地球ひろば（広尾）講堂、2008年6月10日。

〔図書〕（計 1 件）

【1】ティムール・ダダバエフ、『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心—』、アジア経済研究所（アジアを見る眼110）、216頁、2008年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ティムール・ダダバエフ (Timur Dadabaev)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10376626